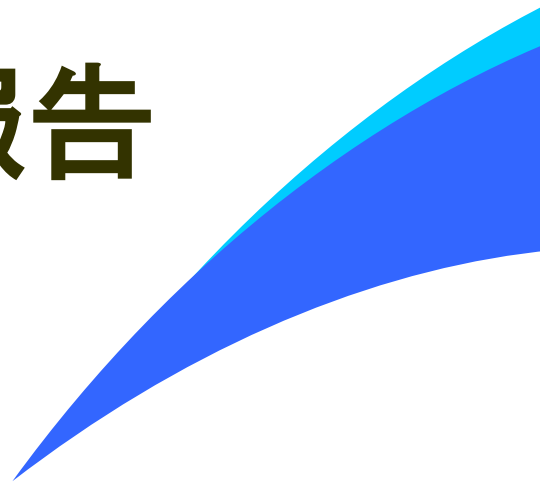


ディスカッション報告



ディスカッションについて

この章では合同学生会議の中心的プログラムであるディスカッションについての詳細内容を報告します。ディスカッションは合同学生会議中に計8回行われ、トピックは多岐に渡りました。トピックについては、あらかじめ両地域の学生に希望を取りつつ、これまでの合同学生会議の経験を参考にして決定しました。

今回の報告書では、ディスカッション中に録音した記録をもとにディスカッションの内容を要約して紹介します。また、各ディスカッション後に参加者が書いた感想文より各参加者の感想を紹介します。

ディスカッション① 合同学生会議に参加するにあたって

山古志に到着した翌日、どのような動機や期待を持って合同学生会議に参加しているか、一人ひとりが意見を述べる時間を持ちました。

イスラエル人参加者からは「兵役経験を通して自身が武力闘争に関わっているという実感を持つようになった。政治的に複雑な状況下で、その中で生きる個人の意見を聞きたい」「共に同じ紛争という問題を考えていくなかで、自分と立場の異なる考え方に必然的にさらされていく。そのようにしてもたらされる変化が個人的であっても、現在の状況の改善に少しでも影響を与えられるのではないか」といった意見がありました。パレスチナ人参加者からは「直接的な対話のチャンスは、お互いの意見を知るよい機会になると思う。イスラエル人参加者に、日々不安にさらされているパレスチナ人参加者の生活の様子を知ってもらいたいし、平等の観点から、パレスチナも他国と同様の地位があることを訴えたい」「第二次インティファダを経験した。紛争は自分の生活の一部であり、そうであるなら、解決の一部にもなれるはずだ」といった意見が聞かれました。また、日本人参加者は「学生による直接的対話という行為の平和に向けた実効性についてははっきり言えないけれども、この活動は価値あるものと確信している」と、合同学生会議を運営する意義を考え続けたい、という意志が示されました。

また、ディスカッションは、昔ながらの生活習慣を保持し豊かな自然に囲まれた環境で始められました。紛争という日常にさらされている自国から地理的に遠く離れた土地で議論に取り組むことは、相手と対等な立場で向き合うためには有意義であったようです。

最初のディスカッションは、参加者が互いの意見に静かに耳を傾けリラックスした雰囲気の中で行われました。

(8月14日実施 要約:藤田麻名)

ディスカッション② 歴史認識について

合同学生会議初日のディスカッショントピック「合同学生会議に参加するにあたって」に続き、本格的な議論の初回には 1948 年のイスラエル建国を中心に「歴史認識について」が話し合われました。はじめに、パレスチナ人参加者から提供されたイスラエル建国に関する映像を見、歴史認識を確認した後、ディスカッションに移りました。

イスラエル建国以前のパレスチナの状況から議論は始まりました。第一次世界大戦の戦後処理が始められる 1920 年前後まではパレスチナ地域において両者の共生がなされていたという点で見解が一致しましたが、それ以降について、イスラエル人参加者は「初期段階のユダヤ人移民は土地の購入・耕作による平和的方法での移住を行っていた」「だんだん増加するイスラエル人にアラブ人が恐怖を感じ始め一部暴力的な行為が始まった」と述べ、パレスチナ人参加者は「シオニズム運動の元でイスラエル人による移住が暴力的な手段で行われるようになった」と指摘しました。歴史認識は個人によって異なる見解を示し、共有点に到達することが困難なテーマであるともいえます。今回のディスカッションでは、参加者全体の意見として「歴史の理解は、それが語られる文脈によって異なり、それゆえ、『客観的』な歴史認識は存在しない」という点が再三強調されました。

論点は、オスロ合意の後も両地域の戦闘状態が止まることなかったのはなぜかという点に集中しました。パレスチナ人参加者は、「パレスチナは軍事力や経済力、物資や教育レベルで圧倒的な強者であるイスラエルに対して、合意条項に関しても強気な姿勢で臨むことができない、イスラエルが提示するものに対して妥協せざるを得ない」と主張しました。イスラエルの政策によって、物資や水など、生活必需品の供給にも困難を伴うという現状は、パレスチナ人参加者の「圧倒的な力を持つイスラエルがパレスチナに対し取っている政策は、ただパレスチナ人を苦しめることが目的のように感じられる」との発言にも見られるように、パレスチナにとって大きな苦痛となっています。しかし一方、イスラエル人参加者は、イスラエル人の持つパレスチナに対する恐怖心について言及し、「イスラエルとパレスチナ自治区の境界であるグリーンラインを越境して建設されている分離壁は、パレスチナ自治区に点在する入植地の安全を確保するためである」「自爆攻撃を目的とした人物がイスラエルに侵入することを防ぐために検問所の管理は厳重に行われるべきである」と主張しました。オスロ合意の破綻は、双方の不信感と恐怖感が大きな原因であることが明らかに

されました。

ディスカッションが進むにつれ議論が白熱しましたが、イスラエル人参加者が、パレスチナ人参加者の提供した映像について、パレスチナ側の視点に極端に偏った映像ではなかったことに感謝の意を表し、ディスカッションが閉じられました。

(8月14日実施 要約:藤田麻名)

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

このディスカッションの事前のミーティングがとても刺激的だったのでそれが参加者間の友好的な関係にどう影響するのか不安でした。しかし、議論が白熱しすぎなかったことはとても嬉しいです。このようなディスカッションが続き参加者間での意見交換が進むことを楽しみにしています。

パレスチナ人参加者

今日のディスカッションは、以前は私が知らなかった新しい情報を学ぶことができとても興味深いものとなりました。和やかな雰囲気の中で議論が交され、両者は平和的に、そして互いを尊重しながら意見を言い合いました。もし、政治の場でこのような話し合いが行われたら平和の実現も可能となると思います。個人的な経験は、感動的で、議論の場は他者の視点を知る絶好の機会となりました。

日本人参加者

私がこのディスカッションで非常に興味があったのは、両地域の多数派と少数派の意見です。たとえばイスラエル人の学生は、入植者たちはイスラエルの中でも極端な考えを持つ人たちで多数のイスラエル人はそれに対して反対していると言います。しかし私たちの他者へのイメージは大概極端な人びとを反映したものとなっています。それを見極めることは非常に大切なことです。参加者たちは彼らの来た地域を代表しようとする傾向がありますが、個人的な意見についてももっと聞きたいと思っています。

ディスカッション③ 平和とは何か

このディスカッションでは、①紛争に関する個人的な体験、②参加者それぞれにとって平和とは何かを話し合いました。また、前回のディスカッションの反省をもとに、日本人の質問の時間を設けるなど日本人参加者のディスカッションへの参加の機会を増やしたディスカッションとなりました。

まず日本人参加者の「イスラエル・パレスチナでは日常的に撃ち合いのようなことが行われているのだろうか」という質問から始まり、その後議論は、イスラエル軍の行動は「過剰」な防衛ではないかという点に移っていきました。パレスチナ人参加者は、猛暑の中、水もない状況で、検問所で12時間待たされたことや自分の母親がイスラエル兵によって受けた苦痛などを語り、なぜそこまで過剰ともいえる行動をするのかと疑問をイスラエル人参加者にぶつけました。それに対してイスラエル人参加者からは、多くのイスラエル人は、この合同学生会議のようにパレスチナ人と接する機会は乏しく、漠然とした恐怖や憎しみを抱いていることを話しました。また、検問所にいる兵士の中には、18歳程度の若い兵士が多いにもかかわらず、彼らが重要な局面で責任の重い決定を下さなければならず、恐怖心などから過剰とも言える行動を取ることがあるという説明がされました。またあるイスラエル人参加者は、過剰な行動をするのは一部の特別な人々であるとし、軍隊の中には様々なバックグラウンドを持った兵士がいるため、倫理の基準がバラバラであると指摘しました。個人的な経験を話すということもあり、途中参加者が言葉を詰まらせたり、目に涙を浮かべたりするというようなこともありました。

その後、参加者それぞれにとって平和とは何かを話し合いました。具体的には和平が実現したときの理想的な状況をそれぞれが10分程度プレゼンテーションのような形で発表していきました。パレスチナ参加者からは「平和が実現するとしたら、お互いが国として独立し、平等な権利を得ることが理想的である」と発言しました。また、あるパレスチナ人参加者からの難民の帰還権についての「帰還を望む人々は、その権利を得るべきだ」という意見に対して、あるイスラエル参加者は「現実的に考えると、難民が元の土地に帰還することは不可能である。なぜなら現在、難民の数は増加しており彼らがもともと住んでいた土地には新たに人々が住んでいる。入植地に関して、入植地ができるまでの経緯は様々であるが、現実そこに生活している人がいる。」と言い、「その上、非常に多くの人々であり、現実的に全

ての入植地から撤退するのは不可能である。このように平和を実現するとしたら、お互いがどこかで妥協をしなければならない。」と発言しました。

このディスカッション 3 では、イスラエル兵の実情やイスラエル市民のパレスチナ人に対する考え方を知り、またパレスチナ人の日常における困難などを共有することが出来たので、普段は接することがなく相手を知る機会のない両者にとって、有意義なディスカッションになったようです。また言葉に詰まり、目に涙を浮かべる参加者を見て、彼らにとって紛争が日常の一部であるということが再認識されました。また、ディスカッションの後半では両者が現実的な平和を強く求めていることが明らかになったものの、同時に平和を現実的にするための妥協点をどこにするかという点で意見が割れており、この問題の難しさを突きつけられました。

(8月15日実施 要約:外山雄也)

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

このディスカッションはとても感情的であり、特別なものでした。私は前にも紛争の被害者について話す機会がありましたが、紛争に関する個人的な体験を話した今回のディスカッションは、今までに経験したことないものでした。なぜかという、私の隣に座っていたパレスチナ人参加者が目に涙を浮かべながら、彼女の経験を話していたからです。そして、その話にも私も共感し、思わずもらい泣きしてしまいました。このディスカッションを通して、お互いの辛い経験を共有することができたのは、私にとって素晴らしい経験となりました。

パレスチナ人参加者

私たちはこのディスカッションで難民問題を含む白熱した議論を繰り広げました。イスラエル人参加者はパレスチナの人々が何に不満や怒りを感じているのか、何が解決に必要なのかを理解していました。イスラエルの現状は平和構築への大きな制約があり、入植地からの撤退も困難を伴うものだという印象を受けました。

日本人参加者

私は今回のディスカッションで両地域の参加者が検問所の存在を容認していることに驚きを隠せませんでした。私個人の意見としては検問所の撤去なくして、この問題の本質的な解決はあり得ないと思うのですが、彼らは検問所が両者の間に亀裂を生みだし、特にパレスチナ人が不当に扱われているにもかかわらず、その存在の前提とした上で何がなされるべきかを話し合いました。

ディスカッション④ 和平の阻害要因について

ディスカッション 4 では、紛争の焦点、つまり和平実現の阻害要因とは何かを巡って議論が交わされました。ディスカッションの初頭に、パレスチナ人参加者の一人が持参したイスラエル・パレスチナ問題を扱ったドキュメンタリー映画が放映されました。このドキュメンタリー映画は、主にパレスチナ側からの視点によって制作されており、使用言語は英語です。歴史的事実の確認にとどまらず、当該地域内外の知識人・ジャーナリストに対するインタビューが構成の多くを占め、学術的な印象を受けるものでした。参加者の説明によれば、イスラエル・パレスチナ問題について、英語圏、あるいは英語話者の人々の関心喚起を図るための映画であるとのことでした。

放映終了後、10 分ほどの休憩をはさんで、議論は日本人参加者の質問から始める方式がとられました。これは、イスラエル人・パレスチナ人参加者間の議論が白熱した際に、日本人参加者が議論に参加することが困難になりがちな状況を踏まえての措置です。

はじめに日本人参加者の一人から、イスラエルの安全保障政策についての質問が出されました。特に、イスラエルとパレスチナ自治区を分かつ、「分離壁」が議論の的となりました。この「分離壁」が安全保障目的以外の、政治的目的で建設されているのではないかという考えが提示されました。イスラエル政府による「分離壁」建設により、パレスチナ人居住区が分断され、水資源など有用な土地へのアクセスが困難となる、と言った事態が事実であることの確認に次いで、イスラエル人参加者からは、最近の傾向として、イスラエル政府とは独立にイスラエル最高裁判所によって、安全保障目的以外の目的で建てられた不当な「分離壁」の取り壊し命令がなされ、「必要悪として最小規模」の安全保障政策への転換がなされている途中である、との説明がなされました。

この「分離壁」については、パレスチナ人参加者が実際にその存在によって、移動の自由を制限され、それに伴っての医療機関へのアクセスが困難になる等の被害を受けており、議論では、理性的ではあるものの、激しいやり取りが交わされました。

イスラエルの安全保障政策に始まった本ディスカッションは、「妥協点を見出すこと」「交渉の担い手となるリーダーシップの確立」という論点へと集約されていきます。和平を実現可能なものするためには、歴史認識の問題に拘泥するのではなく、現状の適切な認識に基づいた政治的判断が必要であり、そこにおいては、一方の主張・要求が

受け入れられることは不可能である、との意見が出されました。お互いが歩み寄るためには、「妥協」が必要である、との意見が示される一方、パレスチナ人参加者の一人からは、パレスチナはこれまで一方的に「妥協」を強いられてきた、との認識が示され、ここでも議論は紛糾しました。参加者の間で、これまでのイスラエルの政策傾向、パレスチナ自治政府の方針に対する評価がなされた後、主題は「交渉の担い手となるリーダーシップの確立」へと移っていきます。ここでは、自国の政府が（パレスチナ人参加者にとっては自治政府が）、一般市民の意見を適切に反映しているのか、政治レベルでの認識と市民レベルでの認識に乖離が存在しているのではないか、という点を巡ってお互いの考えを聞きあうことになりました。政治レベルにおいて、市民の考えを十分に反映した政策が実施されるためには、「交渉の担い手となるリーダーシップの確立」が重要であることが明らかになりました。市民の意見を適切に反映した交渉主体が、イスラエル・パレスチナの両方に確立されることが緊急の課題であるとの認識が共有されました。その為に、政治に限らず、社会のどの分野においても、和平実現に向けたリーダーシップが次世代において涵養されることの必要性についても認識の共有が実現しました。

3時間にわたって、真剣な議論が行われ、和平実現に向けてのリーダーシップが、本合同学生会議参加者の1人1人のうちに涵養されつつある様子が確認されました。(8月15日実施 要約:武藤康平)

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

このディスカッションでは、パレスチナ人参加者が平和を実現するためには妥協が必要であると考えていることが分かりました。それは私にとってすごく重要な意味を持っています。なぜかというと、私たちが自分の地域にいる時に忘れがちな「希望」をもたらしてくれたからです。

パレスチナ人参加者

紛争の解決には大きな困難が伴うことが確認されましたが、次回のディスカッションでは参加者間の距離が縮まり、より具体的な解決案について話し合いが持てることを望みます。

日本人参加者

ディスカッションを通して、イスラエル兵が検問所を通るパレスチナ人から恐怖を感じていることを知りました。「分離壁」の建設が自爆攻撃を減少させる役割を果たしていても、本当の平和は壁のない状態で達成することが出来ると思います。また、イスラエル人参加者の「イスラエル人とパレスチナ人双方が紛争の犠牲者」という発言が特に印象的でした。

ディスカッション⑤ イスラエルのパレスチナの多様性

ディスカッション5では、イスラエル・パレスチナそれぞれの地域内における「多様性」について話し合いが持たれました。各地域内にはバックグラウンドや宗教の違いのほか、政治的見解の相違も存在するため、それぞれの社会を単純化することはできません。この「多様性」に対処することは、和平実現の大きなポイントとされています。ディスカッションではまず、日本人学生も含めたイスラエル人参加者グループ・パレスチナ人参加者グループに分かれ、グループ内でのディスカッションをした後、その内容を日本人学生が全体へプレゼンテーションし、そして全員でディスカッションをする形態をとりました。

イスラエル人参加者グループのディスカッションでは、イスラエル内におけるバックグラウンドの多様性の概要を確認した後、主にミズラヒーム（中東諸国出身のユダヤ人：注参照）とイスラエリアラブ（イスラエルに居住するアラブ人）の問題が話し合われました。イスラエリアラブ、ミズラヒームのバックグラウンドを持つ2人の参加者からは、差別の現状やイスラエルへの統合の努力があることが語られ、これに対して他のイスラエル人参加者からは、何であれ、自分の国のために一定期間を捧げることが統合のために必要では、という意見が出されました。また、アシュケナジー（ヨーロッパ諸国出身のユダヤ人：注参照）の文化がイスラエルのものとして捉えられがちだということも指摘されました。

パレスチナ人参加者グループのディスカッションでは始めに各参加者が居住する都市の特徴が紹介されました。教育や産業分野での差異が存在する一方、どの都市でもイスラム教徒とマイノリティであるキリスト教徒は共存しているということでした。また、日本人参加者が政治的な事柄に関する違いについて質問したところ、アラブ諸国の間には保有している資源の多少から敵対心さえも生まれてきていること、パレスチナ人は必ずしも自分たちの統治機構に満足しているわけではない、という回答がありました。

全員でのディスカッションは、日本人学生が要約したグループ内でのディスカッション内容にイスラエル人・パレスチナ人参加者が補足をしながら進められました。グループ内でのディスカッションでは扱われませんが、イスラエル人参加者側からは、人種間の結婚によって、端的にアシュケナジー、ミズラヒーム、イスラエリアラブと分けられなくなっているという視点が提示されました。参加者にとって、互いの社会を深く知ることで、相手をより理解する一助となったようです。

（8月19日実施 要約：篠田恵）

注

ミズラヒーム： イスラエル建国以前はアラブ諸国に居住し、アラビア語を使用していたユダヤ人。

アシュケナジー： イスラエル建国以前は東ヨーロッパを中心に居住していたユダヤ人。ホロコーストの犠牲となった。

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

今回のディスカッションについては、少し残念に思うところがありました。私たちは2つのグループに分かれてディスカッションを行い、もちろん、日本人参加者にとって有意義な時間を提供できたことは事実であり、そのことに対しては嬉しく感じています。しかし、パレスチナ人の考えについて十分深く知ることとはできなかったように感じました。

パレスチナ人参加者

私は今回のディスカッションはパレスチナにおける多様性をイスラエル人参加者、日本人参加者に理解してもらい、素晴らしい機会になったと感じ、嬉しく思っています。また、イスラエルにおける多様性とそれがもたらす社会的差別について知れたことは大変意義深いことでした。

日本人参加者

私は、イスラエルのアイデンティティーについて提案したいです。私は、アイデンティティーとはショートケーキのように層状に形成されるべきだと思います。第一の層は個人の宗教や民族に関係するべきです。人々はお互いに自分以外のアイデンティティーを尊重するべきです。そして、その、第一の層を覆うようにイスラエル国家としてのアイデンティティーが存在するべきだと考えます。そのことで、国内の多様性が尊重されることが出来ます。そして、私は最終的にイスラエルとパレスチナも中東の住民としてのアイデンティティーを共有できる日が来ることを願っています。

ディスカッション⑥ メディア・教育について

このディスカッションではメディアと教育をトピックに、それぞれが紛争に与える影響について話し合いました。トピックの性質上、議論が論点を外れることがしばしばあり、特に自爆攻撃については非常に感情的な発言の応酬がなされました。まず報道について、イスラエル、パレスチナ双方ともに相手のメディアが自分たちについて正しく報道していないことを指摘し合いました、パレスチナ人参加者が「イスラエルではパレスチナの日常が伝えられず、例えば分離壁がパレスチナの人々の生活にどのような影響を与えているか、パレスチナの人々が何を考えているのかを報道しようとしなさい」と言うと、イスラエル人参加者は「パレスチナでは報道機関が未熟で、武装勢力によってプロパガンダ的なイスラエルの悪いイメージばかりが先行し敵対心を煽るような報道がされている」と言い、それぞれがメディアの偏った報道によって、お互いの実際に考えていることを正しく理解する妨げとなっていることを確認する結果となりました。

また日本を含む中東以外の報道機関がこの紛争をどのように取り上げているかについても触れられ、普段日本人が得ている情報が適切なものであるのかという指摘に加えて、客観的な報道とは何かということについても話し合いがもたれました。

教育については、やはりここでも相互理解を妨げるような教育がなされているのではないかという問題意識があり、イスラエル人参加者側は「お互いの地域を理解するような教育プログラムが存在しない」ことを認めました。するとパレスチナ人参加者からは、「紛争によって教育が停滞している」という発言があり、お互いの教育現場の難しさを確認しました。また日本人学生からは教育こそが紛争の連鎖を断ち切る有効な手段であるという発言もありました。

メディア、教育の両域が紛争を助長するような状況である一方、しかし両地域の相互理解に向けて積極的に活動している NGO 団体などが多くいることも話され、個人個人が既存のメディアや受けた教育にのみに寄り感情的になることなく、相手を理解する姿勢が重要であることが確認されました。

(8月19日実施 要約:荒井和人)

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

このディスカッションは、非常に雑然としたものになったと私は感じました。マスメディアにおいて「自爆攻撃」がどのように報道されているか、について議論したことがきっかけです。パレスチナ人参加者からの過激な意見を聞くことは、私にとって、この合同学生会議の目的そのものを問いなおさなければならぬような経験でした。一方で、メディアと教育において議論したことに、行き詰まりも感じました。全ての議論は、相手側の意見を理解することから始まるべきです。しかし、今回のディスカッションにおいては、相互理解がなされたとは思えませんでした。

パレスチナ人参加者

今回のディスカッションでは、紛争の現実を巡ってのメディアの役割について活発な議論を持つことができました。イスラエル人参加者から、「イスラエルのメディアでは聞いたことがなかった」という言葉も聞くことができ、私もまた、これまで知らなかった事実を知ることができました。

日本人参加者

このディスカッションでは前回のディスカッションでの参加者の一人の発言が思い出されました。「もしも敵同士が個人として出会い、個人としての理解に努めさえすれば、戦争は起こらない」私はこういった考え方が楽天的であると感じつつも、間違っているとは思いません。個人と個人が出会う前に、メディアと教育によってたがいの理解が歪められる現実に向かい合う機会を得ました。

ディスカッション⑦ エルサレム問題について

ディスカッション7は、長野高校生プログラムの小討論会で触れることのできなかった紛争の焦点、エルサレム問題について話し合いました。エルサレムは、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の3つ宗教の聖地があり、イスラエル、パレスチナ双方とも首都であるとして主張しているところです。また、近年はエルサレム近くでの「分離壁」や入植地の建設、イスラエル市民が犠牲になる事件により緊張感が高まってきているといえます。

ディスカッションのはじめに、イスラエル人参加者2名がNGOの作成したエルサレムの地図を見せながら、「分離壁」や入植地、難民キャンプ、人々の居住状況などを紹介していきました。問題となったのは「どこに境界線をひくか」という点ですが、エルサレムに限らず西岸地区全体が議論の対象へと広がっていきました。パレスチナ人参加者はグリーンライン(第一次中東戦争終結後の停戦ライン)をもとにすることを主張しましたが、イスラエル人参加者は、パレスチナ自治区・西岸地区の一部の土地をイスラエルのものにする代わりに、現在のイスラエルの土地をパレスチナに渡す「土地の交換」を提案しました。これには、エルサレム近郊と西岸地区にあるいくつかの入植地は、1つの都市と言えるまでに人口が増え、撤退が難しいという背景があります。ただ、パレスチナ人参加者にとっては入植地が存在し続けることは受け入れがたいことであり、パレスチナ難民の帰還権をあきらめるといふ大きな譲歩をする代わりにイスラエル側も譲歩すべきだと主張をしました。この入植地や難民問題は以前から紛争の焦点として解決が難しい問題とされており、イスラエル人・パレスチナ人参加者のやり取りの中で、互いの譲歩する点の違いが明らかとなりました。また、本来望んでいたことが、長引く紛争の中で起こる状況の変化で実現が難しくなっているという事実が浮き彫りとなりました。そして、あるイスラエル人参加者は「現実に即して、持続可能な解決策を考える必要がある」と述べました。

このように議論が白熱しましたが、一度休憩をいれ、後半は参加者がエルサレムをどうするべきだと思うか述べ合いました。その中で提案されたことは、3つの宗教の聖地がある地域を国際管理にするというものであり、多くの参加者が賛同しました。議論の中では、キリスト教の聖地の取り扱い、巡礼がもたらす経済効果、軍の管理と統治の違いなどについても触れられました。また、日本人参加者は「誰が管理するかではなく、聖地に自由に礼拝できる権利があることが重要

ではないか」と話しました。加えて、参加者の中では個々の意見として自分たちの聖地を国際管理下に置くことを受け入れ、参加者間だけでも合意が形成されたという事実に参加者たちは達成感を得ていたようでした。一方で「宗教的に敬虔な人など認めない人も多いのでは」という指摘もされ、イスラエル・パレスチナ問題の複雑性や解決方法を策定していく難しさが確認されました。

(8月25日実施 要約:松本真実)

ディスカッションの感想

イスラエル人参加者

今日の議論は、両者の間に宗教的信仰の強い参加者がいなかったことがうまく議論が進んだ要因だと思います。

エルサレム問題はその3つの宗教の聖地であるという重要性が絡み、取扱いがとても難しい問題です。私たち全員は、宗教的に世俗的であり、過激な考えに基づく意見が出てこなかったことがエルサレムを国際管理下に置くという妥協案に達することが出来ました。

個人的には、この案が最も合理的な解決法ではないかと思います。しかし、この案が現実的なものであるかという点には疑問が残りました。

パレスチナ人参加者

今回のディスカッションは建設的でしたが、私たちの知識不足のためあまり議論をよぶトピックについて触れられませんでした。なにはともあれ、指導者たちが、私たちの故郷であるエルサレムへの訪問が可能になるように計らってくれることを望みます。

日本人参加者

エルサレムに関するディスカッションは取扱いに慎重を要するものでした。両者にとってエルサレムの帰属が死活問題であるということに改めて気付きました。パレスチナ人がエルサレムへの帰還を望んでいる一方で、イスラエル人はパレスチナ人の流入を恐れているということを知りました。

ディスカッション⑧ 合同学生会議後の展望

ディスカッション 8 では前半部と後半部に分かれ、前半部ではそれまでの合同学生会議を振り返り、どのようなことを感じたのかを日本人参加者含めた全員が発表し、後半部では各自が知っている NGO 団体などの情報を共有しあい、未来に向けて個人として何ができるのかを話しました。最終日に行われるフィードバックの時間を除いては、話し合うことができるのはこれが最後の機会となりました。

日本人参加者からは、合同学生会議に参加したことでイスラエル・パレスチナ問題の視点に影響を与えられたことや、イスラエル人・パレスチナ人参加者と話していく中で、日本国内にある問題を意識するようになったと述べる参加者もいました。イスラエル人・パレスチナ人参加者からも同じように意見が発表され、なかには非常に印象的な意見を言う参加者もいました。あるパレスチナ人参加者は、「この会議に来る以前自分はイスラエル兵をかなり嫌っていて、兵役に参加しているイスラエル人参加者に対しても、同じような感情を持っていた。しかし実際に会って話してみると、彼は特別な人間ではなく自分と同じ普通の人間であることに気づくことができた」と述べていました。またこの合同学生会議を通してイスラエル・アラブと会うことができたのは非常に貴重であったことが、イスラエル人・パレスチナ人参加者両方から述べられました。またあるイスラエル人参加者からは、「この合同学生会議中多くの時間を日本人と過ごすことによって、自分たちの性質を意識させられた」と発表をする参加者もいました。このディスカッションは、東京に入った後では対外イベントが多くなるため、長野滞在中にこれまでの合同学生会議についてしっかりと振り返ろうという目的のもと行われました。このようにそれぞれの参加者が思っていることを全員で共有することができたのは非常に貴重な機会だったと思います。

後半部では、イスラエル人・パレスチナ人・日本人参加者それぞれが知っている NGO 団体を発表しました。ディスカッションの終盤では、他の NGO 団体と比較して合同学生会議について意見を述べ、この合同学生会議の改善点を挙げたりしました。その中で、この合同学生会議の運営面に対する意見や、またディスカッションの形式に対して非常に良かったという意見も出ました。これらは来期へのフィードバックとして当団体が活かしていきたいと思います。(※このディスカッションの感想は 49 ページの個人総括に反映されています)

(8 月 25 日実施 要約:平山祐理)